

# 英語教育における「異文化理解」の語られ方を問い直す

中原 瑞公

## 1. はじめに

本発表の目的は、エドワード・サイードが主著『オリエンタリズム』において提示した理論にもとづき、日本の英語教育における「異文化理解」の前提を問い直すことである。「異文化」という語が使用されるとき、その対極には「自文化」が存在する。ここから「自文化／異文化」という二項対立が自ずと構築される。本発表では、この二項対立を自明視することから生じている3つの前提を検討する。すなわち、(1)「文化」は実体である、(2)「文化」の単位は集団である、(3)「異文化理解」を通して「自文化理解」が促進される、の3点である。

## 2. 方法：エドワード・サイード『オリエンタリズム』による考察枠組み

オリエンタリズムとは、西洋の東洋に対する「存在論的・認識論的弁別にもとづく思考様式」(Said, 2005, p.3)である。平たく言えば、「我々／彼ら」という二項対立のもとで西洋が東洋に対して持ち続けてきた、ものの見方や考え方ということになる。加えて、西洋と東洋のあいだの関係は「権力関係であり、支配関係であり、複雑なヘゲモニー関係」(p.5)であるから、オリエンタリズムは思考様式であるだけでなく、「東洋を支配し、再構築し、東洋に対して権威を及ぼすため」(p.3)の支配様式でもある。

そのような不均衡な関係のなかで、西洋は東洋（東洋人）を創り上げた。東洋はその内実とは無関係に、西洋にとって都合の良いように存在させられた。西洋によって創り上げられた「異文化」としての東洋は、東洋のあるがままではなく、西洋による「表象 (representations)」(p.21)であると言える。

オリエンタリズムは二項対立の両極に西洋（西洋人）と東洋（東洋人）という所与の枠組み（集団）を必要とした。それぞれには「高潔／墮落」、「成熟／幼稚」、「正常／異常」のように、対になる特質が割り当てられ、集団の本質化が行われた。そこでは、集団の特質は不変のものと考えられた。また、西洋と東洋が本質的に異なるという前提は、あくまでも西洋が不均衡な関係のなかで一方的に語り続けてきたものであり、東洋の側がそれに対し異議を唱えることはなかった。さらに、異なることが強調されるとしても、集団内部の差異には意識が向けられなかった。つまり、「西洋人とは誰か」、「東洋人とは誰か」という問いは存在しなかった。

オリエンタリズムのプロセスを通して、自らを東洋から対立させ、東洋とは対になる特質を自らに割り当てることによって、西洋は「力とアイデンティティ」を強化し (p.3)、常に東洋に対して優位を占めようとした (p.7)。オリエンタリズムは、単に西洋が東洋（東洋人）を創り上げることにだけ関わるものではない。オリエンタリズムは、西洋が自らのアイデンティティを獲得し、強固なものにしていくための様式でもあった。

## 3. 考察：「異文化理解」の前提を問い直す

ここからは「自文化／異文化」の二項対立を自明視することから生じている3つの前提を検討する。

### (1) 「文化」は実体である

英語教育における「異文化理解」では、安定した「自文化」がまず存在し、その外部に実体としての「異文化」が存在することが前提となっている。「異文化」は「自文化」とは明確に異なる実体として存在するからこそ、「理解」の対象になりうる。しかし、オリエンタリズムが示すように、「異文化」と呼ばれて存在を自明視されているものは、何らかの利害関係のもとで存在させられていると考えるべきである。教室において学習者が触れる「異文化」の知識（事実）は、特定のイメージを学習者に浸透させるために意図的に創られたものかもしれない。「異文化」が自己や他者のイメージの表出に過ぎないとすれば、その「異文化」を無邪気に「理解」しようとすることは果たして適切なことなのかどうか、慎重に考える必要がある。

### (2) 「文化」の単位は集団である

英語教育における「異文化理解」では、「文化」の単位は集団であることが前提とされる。特に、集団は国家に属する国民としての「〇〇人」と同義であることが多い。多種多様な個人は集団に押し込められ、二項対立の両極に固定され、その特質を一元的に説明される。

二項対立において2つの「文化」＝集団を考えると、それぞれの「文化」は異なることが自明視されている。このとき、一方の「文化」に否定的意味合いが付与されることがある。例えば、英語教育において「日本

人」が「英米人」と対比される場合、「日本人」のコミュニケーションスタイルは矯正されるべきものと見なされる。ここでは、全ての「日本人」が共通のコミュニケーションスタイルを共有し、それは不変であることが前提となっており、具体的なコンテキストや変容の可能性は考慮されていない。「文化」に本質があるとする見方は、本質は初めからあるものではなく構築されるものであるということを見落としている。

2つの「文化」＝集団の違いが強調される場合でも、それぞれの内部に光が当たることはめったにない。上記の「日本人」に関する言説であれば、「日本人とは誰か」のような問いは「異文化理解」において問われることはない。「異文化理解」では、違いを際立たせて「異文化」を本質化するだけでなく、「自文化」内部まで本質化することが当たり前となっている。現状では、英語教育における「異文化理解」は、「文化」内部の多様性や雑種性への意識が極めて希薄である。

### (3) 「異文化理解」を通して「自文化理解」が促進される

日本の英語教育では、「異文化理解」が「自文化理解」に資するという考え方が根強い（例えば、「異文化」を知ることで、「自文化」を相対化し、自文化中心主義を回避できる、という見解）。しかし、「異文化理解」が二項対立を前提とし、学習者が立ち返ることのできる安定した「自文化」と消費、鑑賞の対象としての「異文化」が自明視されている以上、授業内での一過性の「異文化理解」体験が終われば、学習者は「自文化」に回帰することになるであろう。加えて、日本に固有の問題として「自己オリエンタリズム」についても考えなければならない。「異文化」としての欧米諸地域を「自文化」よりも優位に置き、さらにそれ以外のアジア、アフリカ、南米を「自文化」よりも劣位に置き、自ら「文化」の階層構造を創り上げる。このような不均衡な関係のなかで「異文化理解」を通じた「自文化理解」をめざしても、最終的に学習者は「自文化」優位にたどり着いてしまうかもしれない。

## 4. まとめと今後の課題

本発表では、日本の英語教育における「異文化理解」の前提がオリエンタリズムの諸相と著しく類似していることを明らかにした。今後、英語教育における「異文化理解」研究は、「自文化／異文化」という二項対立をいかに超克していくのかを研究課題とすべきであろう。以下では、そのための視点として「個の文化」、「第三の文化」を紹介する。加えて、研究のアプローチとして批判的研究の必要性についても述べる。

英語教育における「異文化理解」では「文化」の単位は集団であり、多種多様な個人は「〇〇人」という集団に押し込められてきた。日本語教育には「個の文化」という考え方がある（細川, 2012）。これは「文化」の単位を個人とする考え方であり、「文化」とは「人間一人ひとりの個人の中にある不可視知の総体」（p.84）と定義される。この考え方を取り入れることで、「〇〇人としてのわたし・あなた」ではなく、「ひとりの人間としてのわたし・あなた」に焦点化して「異文化理解」を考えることができる。

「異文化理解」は「自文化／異文化」という二項対立を前提に議論されてきた。二項対立を再考する考え方としては「第三の文化（third culture）」がある（Kramsch, 2009）。「第三の文化」は、二項対立そのものを否定する考え方ではなく、二項対立のなかで学習者が自らの立ち位置を見つけることを促す考え方である。「第三の文化」では、「自文化」と「異文化」のいずれにも帰着せず、「中間にいたいこと（being 'in-between'）」（p.238）は歓迎される。この考え方を取り入れることで、学習者自らの感覚を伴う「文化」の発見という観点から「異文化理解」を考えることができる。

最後に、研究アプローチの問題である。今後、「異文化理解」研究は、批判的研究（e.g., Pennycook, 2021）の一環として展開される必要がある。まず、乱用される「文化」ということばに対する批判的眼差しが何よりも重要になる。加えて、「異文化理解」をコンフリクトに満ちたものとして捉えなおすことも重要である。つまり、「文化」と差別や抑圧など負の問題を結び付けて考察することが求められる。最後に、「異文化理解」の前提を絶えず問い直し続けることである。本発表が行ったような問い直しの実践を英語教育研究内部においても活発化させていかなければならない。

## 5. 参考文献

- Kramsch, C. (2009). Third culture and language education. In V. Cook & L. Wei (Eds.), *Contemporary Applied Linguistics. Volume 1. Language Teaching and Learning* (pp.233–254). Continuum.
- Pennycook, A. (2021). *Critical Applied Linguistics. A Critical Introduction. Second Edition*. Routledge.
- Said, E. W. (2003). *Orientalism. 25th Anniversary Edition*. Vintage Books. (Original work published 1978.)
- 細川英雄 (2012) 『「ことばの市民」になる一言語文化教育の思想と実践』 ココ出版。